

H 2 8 . 1 2 月 号

◆金澤健 選

松山市で私が毎月主宰している滑稽句会。今回のお題は「乳」でした。この会では、季語を必ずしも必要としません。今回も皆さんユニークな句を出されまして、大いに句会が盛り上がりました。八木会長、久我正明氏をはじめ参加者の満場一致により、是非、協会報へ寄稿しようということと相成りました。私の文責にて取りまとめ、寄稿させていただきます。(ばかばかしくて相済みません)

花ちゃんと俺の乳房やみぎひだり 井口夏子

どこかで聞いたような歌と同じ情景が描かれています。くれぐれも家庭内ご円満に。作者の実体験に基づく句かどうかは、お聞き致しませんでした。

ちちぶさ乳房の膨らみを言ひ高からず 八木 健

虚子の「浴衣着て少女の乳房高からず」にインスピレーションを得て作った句なのだそうです。綺麗に仕上がっています。もちろん、滑稽味も効かせてあります。

昼顔やぶらりぶらぶら乳帰る 久我正明

昼顔は「人妻の不倫」の隠語だそうです。不倫帰りの人妻を詠んだ句という解釈が成り立ちます。それとは別に、「ばかばかしくも可笑しい」というナンセンスの滑稽句と受け取ることも可能です。

貧乳がうらやみ豊乳あせも搔く 金澤 健

女性なら、豊乳ゆえの悩み(肩こり、あせも)をお持ちの筈です。悩みの心配のない貧乳の方も、実は、心の底では羨ましがっておられるのでは。(女性でもないのに、僭越ですが)

以上、「乳」の会の滑稽句会でした。

◆日根野聖子 選

俳句をつくり初めて数年経つと、それなりの数の俳句ができる。そろそろ句集をつくってみたいと思う俳人は多い。しかし、一方で、「まあ、いづれそのうちに」「また来年考えてみるさ」「句集を出すのはまだ早いんじゃないか」、などと思っているうちに一年が終わる。結局、何も動かないままに、あっという間に数年が経ち、作りたい作りたいと思っているだけで、機会をどんどん逃してゆく。

ところが、平成二十七年、何と句歴一年で句集を出した方がいる。会報第九十三号の「この人」にご登場くださっている愛媛県松山市在住の梅岡菊子さんである。梅岡さんは、更に翌年、つまり、今年句歴二年目にも句集を発表。その二冊の句集より滑稽句の一部をご紹介します。

～第一句集「俳句歴一年」より～

秋の字をのせて心の愁ひかな

これなんじやなんじやもんじやの花なんじや

逃げる蛇そのひと筆の草書体

人間をロマンチックに朧月

ハンガーのシャツを躍らせ春一番

房葡萄おしくらまんぢゆうしてあたり

実石榴の赤青空にぶらさがる

峰雲の裾もちあぐる観覧車

湯気に顔洗はれおでん鍋のぞく

～第二句集「句楽」より～

あいさつの笑顔に似たり雪割草

秋の蝶追跡すれば秋の花

揚花火闇をおしあげひろげたる

青梅餅三つ食べても句にならず
鵜箒に焦げて舳先の水さわぐ
鵜の川に張られてをりぬ闇の幕
オーロラの仲間と思ふシャボン玉
泳ぐためではない浜の水着のショー
カラオケのマイクのやうな葱坊主
風花のひとつぶごとにある自由
片陰の井戸端会議のよこならび
掛け軸を読めず食ひ散らかして紙魚
攻撃は天賦の才や子蠮螋
この空に君臨威圧の雲入道
春愁の顔の三枚三面鏡
師走なり弟子の私も駆け足の
散ることが楽しくて散る山茶花よ
手にとりて胡瓜がマイク歌ふ児ら
夏燕さながらブルーインパルス
夏瘦にうな重を食ふ季重り
ふらここを漕ぎ天国にちかづきぬ
ほくほくのほくは発句とも零余子飯
ゆく年の湯ぶねに浮かびあれやこれや
幼児を泣かせてこそその里神楽

梅岡さんは、池坊華道講師として三十年余りご活躍。いずれの句集にも活花の作品が添えられており、ホッと心が和まされる。